

| 三重大学 広報誌 |



WAVE MIE UNIV.

MIE
UNIVERSITY
NEWSLETTER

42 2010
7
July



| 特集 |

まちづくり・ひとづくり

| 特集 |

まちづくり・ひとづくり

CONTENTS

[View of This issue]

- 01 街をつくる津市と、ひとをそだてる三重大学。
●理事・副学長 | 野村由司彦

[特集 / 対談]

- 02 まちづくり・ひとづくり
●津市長 | 松田直久 + 学長 | 内田淳正
司会 | 理事・副学長 | 鈴木宏治

[RESEARCH FRONT]

- 08 官と民、若者と高齢者が結びつく持続的なまちづくりを目指して。
●人文学部准教授 | 石坂督規
- 10 生活習慣病やメタボ予防に役立つ、運動実践の効果を研究。
●教育学部教授 | 富樫健二
- 12 地方都市再生のための協働型まちづくり・ひとづくりプロジェクトを実践する。
●大学院工学研究科准教授 / 美(うま)し国おこし・三重さきもり塾副塾長 | 浅野 聡
- 14 持続的農業経営と食の安定供給の確立に向けた戦略づくり。
●大学院生物資源学研究科准教授 | 内山智裕

[CLOSE-UP Interview]

- 16 三重県に愛着を持ち地域医療を支えていく医者を育てたい。
●大学院医学系研究科教授 | 堀 浩樹

[連載] CHRONICLE OF MIE VOL.6

- 18 【文学編】作家・尾崎一雄。日本文学における私小説の主脈。
●人文学部教授 | 尾西康充
- 20 【美術編】「大王岬に打ち寄せる怒濤」
●教育学部教授 | 山口泰弘

[三重大学の目指す社会連携⑤]

- 22 知的財産統括室
三重大学の発明者人口を拡大し、研究成果を社会へ還元する。

23 TOPICS

- 24 2010年1月～5月 三重大学の主な出来事



街をつくる津市と、
ひとをそだてる三重大学。

理事・副学長(教育担当)
野村由司彦

まず、数字を見てみよう。三重大学の教職員の約2/3、1,200人、そして学生のほぼ半分、約3,300人が津市内に居住している。市の人口は約29万人なので、約2%に相当する。また、『地方大学が地域に及ぼす経済効果分析報告書』[(財)日本経済研究所・2007年]によれば、大学の活動による津市の税収効果は約2億円、生産誘発額は約286億円に上るといふ。それぞれ、津市の歳入額の2.2%、総合・製造品出荷額の2.9%に相当する。この2~3%という数字、企業であれば研究開発投資額や利益の売上高比と同等であり、津市における三重大学の経済面のインパクトは相当に大きい。数字など挙げずとも、津市や三重県の教育・研究・医療・文化にとって、三重大学の貢献と責任が極めて大きいことは言うまでもない。今回の松田市長と内田学長の対談では、「津は山紫水明に恵まれ、食べ物もおいしい、住みやすい街である」と語られていた。私も同感だ。名古屋から居を移してみると、名古屋はもちろん、関西圏にも気軽に行ける。新しい津市になってからは榊原温泉や美杉がある。足を伸ばせば北に鈴鹿の山、西は伊賀の里、南は伊勢と、どちらへ行っても日本有数の観光県三重を堪能できる。しかも、市街地には県庁を擁して行政機関も集積し、偕楽公園や津城址など歴史にも恵まれている。市長は対談で「生活が市内で完結できる街を目指そう」とおっしゃっておられたが、それに通ずる大学院生のレポートを一部紹介したい。

「津市の北方には、三重大学…などのような多数の若者を集める教育機関が多いし…。現在、津駅の周辺に集客力をもった飲食店が非常に増えている。…ファッションストリートを形成し、そのお洒落なイメージで遠近から顧客を引き寄せべきだと思う」[呉紅再「魅力的な都市への契機」、『トリオ』Vol.11より]。このような意見は、地域および学生主体の問題発見解決型を特色とする、人文社会科学研究科による授業「三重の文化と社会」の成果でもあり、ひとづくりの三重大学とまちづくりの津市とが一体であると再認識できる。

のむらよしひこ
工学博士
専門分野は、コンピュータビジョン、
人工知能、情報処理、ロボット工学





◎特集 / 対談

まちづくり・ひとづくり

津市長 松田直久 + 学長 内田淳正

三重大学は三重県の県都・津市に立地する地域圏大学として、さまざまな分野で市や地元企業との連携を進めています。今回は松田直久津市長をお招きし、「まちづくり・ひとづくり」をテーマに街の活性化や人材育成での連携について、学長と語り合っていました。

豊かな自然と滋味が揃う 住みやすい街・津

司会 本日はお越しいただきありがとうございます。津市と三重大学は2009年に包括連携協定を結びさまざまな活動を展開していますが、本日はまちづくり・ひとづくりを中心とした地域連携の将来像についてお考えをうかがえればと思います。まず、津市の概況についてご説明いただけますか。

松田 現在の津市は2006年、全国的にも稀な10市町村の合併(※1)により誕生しました。面積約710平方キロメートル、人口約29万人の都市となったがゆえに、私は市政運営の基本として、「一体感の醸成」を掲げてきました。これは各地域の文化を一つに統合してしまうということではなく、それぞれの地域の特色を大切にしながらすべての方に新しい津市のことを考えていただきたいという想いが根本にあります。それと同時に元気なまちづくりを目指し、その基礎固めをしてまいりました。津市は昔から住みやすい街とおっしゃっていただいていますので、そのオリジナリティを活かしていくために「住みやすさに磨きをかける」まちづくりを基本とさせていただいております。

内田 私も15年前に津に赴任し、この街の魅力についてはよくわかるようになってきました。東京や大阪などにも住みましたが、津ほど住みやすいところはないというのが実感です。この街は人が住むのにちょうどいいサイズです。自然環境や食べ物、人情など、いろいろな要素が他よりも優れているのではないのでしょうか。本日の対談場所である人文学部の学生ラウンジにも津や三重の特産品の写真を飾り、机や椅子な

どには三重県産の木材を使っていますが、これだけでも身近に素晴らしいものが揃っていると感じます。このラウンジは今年の3月に学生がデザインして作ったものです。とても和やかな雰囲気が好評で、本日のテーマにふさわしいものと思いついていただきました。

松田 素晴らしいラウンジにお招きいただき、ありがとうございます。ご存知のように津には海があり、白砂青松を含む多様な海岸線が広がっています。夏には潮干狩りや海水浴が楽しめ、マリンスポーツのできる素晴らしいハーバーもありますし、鈴鹿山系の山々が連なり、日帰りできるハイキングルートが何百とあります。ゴルフ場の数は全国屈指で料金も安く、桜の花見も美杉地区から芸濃地区、津地区まであらゆる場所で楽しめます。お魚は近海物が豊富で、お肉のおいしさは言うまでもありません。気候が温暖ですから野菜の種類も多く、すべて地産地消でまかなえるわけです。本当に住みやすい環境が整っていますので、これをもっと強く世間へ打ち出していきたいと思っています。加えて、働く場所のあることが街の活力につながりますから、企業誘致にも力を入れているところでございます。

地域医療の中核病院として 救急医療を支援していく

司会 津市の目指すまちづくりに対して三重大学がどのように関わっていくのか、特に地域医療の面についてお考えをお聞かせ願えますか。

内田 やはり三重大学が持っているシーズや知識を、もっとまちづくりの中で活かし

ていくことが大切だろうと思います。特に地域医療については、中心的な役割を担うことが大学病院には求められています。三重大学の医学部の前身は1943年にできた三重県立医学専門学校であり、その母体は1910年にできた津市立病院です。津市の方が三重大学の附属病院を自分たちの病院だと思っていただけなのはこうした歴史的な背景があり、私どもも期待に応えるべく今まで以上に貢献したいと考えております。市長が重要視される救急医療に関しては、安心・安全のまちづくりの中心となるのは一次・二次医療ですので、附属病院が市内の病院へ医師を派遣して支援していきます。また、それらの病院では対応できない三次救急については本年6月に救命救急センターが整備されますので、センターの機能を充実するという形で協力していきたいと考えています。

松田 大学にはいろいろな分野でご協力いただいておりますが、医療分野においての支援は津市や三重県にとって必要不可欠なものです。二次救急輪番病院の専門医不足は大きな問題でしたが、医師会や附属病院からの医師派遣に加えて、輪番病院と附属病院をインターネットで結ぶ画像遠隔医療システムの整備によって受入態勢が強化されました。ただ、なかなか一次・二次・三次医療の違いが患者さんからすればわかりにくく、その住み分けは私どもが思っているより難しいところがございます。これをいかにシステム化していくかがこれからの課題だろうと思っています。市がそうした面から医療機関をフォローすることが医療ネットワークの充実につながりますので、さらなる整備を進めてまいります。

◎司会・進行
鈴木宏治
すずきこうじ
理事・副学長(研究担当)
専門分野は、分子病態学・
血栓止血学・血液凝固学

中心市街地の再生に向けて 学生たちもまちづくりに参加

司会 全国の地方都市が抱えるまちづくりの課題の一つに、中心市街地の空洞化がございます。津市の取り組みについてお話しいただけますか。

松田 中心市街地とは市域の皆さんが集える魅力のある場所であり、一言で言えばコンパクトシティです。その再生に津市の未来はかかっているわけですが、これには特效薬はなく縦の糸と横の糸が重なり合うことで活性化されるものだと思います。市民の皆さんも行政も少しずつ努力していくことによって、気づいたときには人が集まり、それがまた相乗効果を生む、そんなまちづくりが必要でしょう。そのためには、まず中心市街地に多くの方々に住んでいただき、新たな人口を創出することが求められます。コンパクトシティと申しましたが、中心市街地には交通インフラや情報インフラは全部

揃っているわけですから、この住みやすさに磨きをかけていくことで居住していただけるきっかけを提案しなければなりません。もちろん行政だけではなく、民間の方にも魅力を感じて動いていただくために、これからいろいろなシミュレーションをしていきたいと考えております。高齢社会ですからお年寄りの住みやすさも大切です、三重大学の学生さんの中にも中心市街地に住みたいという方もたくさんいらっしゃると思います。その方々にどうしたら住んでいただけるのだろうか考えるのは、難しくも楽しい課題であると感じております。

内田 中心部の活性化を含めて、街が若者にとって楽しい場所であるということは非常に大切な要素です。三重大学の卒業生で三重県や津市に残る人がそれほど多くない原因の一つは、これまで若者にとってまちの魅力が乏しかったのだろうと思います。ただ、今は津駅周辺にはどんどん新しい店ができ、人が集まるようになってきてい

ます。若者も中心街である大門の真ん中に快適な居住空間があれば住みたいと思うでしょう。三重大学では中心市街地の活性化を目指し、学生たちが「つ・だいもん学生マルシェ」(※2)というイベントを大門大通りで開催しましたし、野村證券・百五銀行と共同で行っている創業革新プロジェクト研究室(※3)を中心街に移転しました。他の催しでも市と大学が協力し、若い人が津に残ってくれて住みやすさも向上するような好循環をつくらなければなりません。

また、市長のおっしゃるように、高齢者が中心街に帰ってくる流れはあるでしょう。今までは郊外の一軒家に住んでいた方も、足腰が弱くなると便利な中心街に魅力を感じるはず。それにアメリカではリタイアした人が気候の良いフロリダや西海岸に移住し第二の人生を楽しんでいます。日本もだんだんそういう時代になりつつあると思います。津はハイキングやゴルフが楽しめる自然環境や設備が整っていますし、都会に比べると格段に安くおいしいものが手に入り、非常に心豊かな生活ができるのは間違いありません。私はリタイア世代に津市の住みやすさを強調していくことも、今後は重要だろうと思います。

松田 60歳からの第二の人生を送る場所として、ぜひそういう世代の方にも津市に来ていただきたいですね。また、これまでの人生経験や本物を見る目を活かしてお店を出していただくなど、第二の人生で何かをやってやろうという意欲ある方への支援やチャンスがたくさんある場所というアピールができれば、夢を持って来ていただけるのではないのでしょうか。人生経験豊富でしっかりとした価値観を持っていらっしゃる方に来ていただくと、まちづくりはひとづくりとイコールですので、人に感化されて街も

文化都市へと成長し、付加価値がついてくるものと思っています。

内田 60歳で今までの仕事が終わったとしても、70歳位まではまだまだ労働意欲というのは旺盛です。そういう意味では新たなチャレンジができる受け皿を市がつくってくだされば、街の発展の可能性もどんどん広がっていくはず。また、津市は文化的な素地は非常に高いものがあります。リージョンプラザや県総合文化センター、県立博物館などがあり、大学も公開講座を行っていますので、さまざまな文化や知識にふれられる環境が整っています。高齢者にとっても若い人にとっても楽しみの多い街ですから、それをまちづくりに組み込んでいくことが必要でしょう。

市との連携の幅を広げ さらに地域に開かれた大学へ

司会 今、お話に出ましたが、まちづくりの根本にはひとづくりがあると思います。地域のひとづくりに関する市と大学の連携についてお考えをお聞かせ願えますか。

内田 大学は地域に開かれた知の拠点です。地域の皆さんに大学に来ていただいて、公開講座も含め大学の研究内容や活動状況を積極的に見ていただきたいと思っています。そして、多くの方々に大学でいろいろな知識を身につけていただきたいですし、それを社会で活用していただくことも大学の使命の一つと考えています。また、大学の持つ知財を活かし、市と一緒にシンクタンクとしてまちづくりやひとづくりのプランニングに参加していくことも大学の役割であると思っています。こうした広い連携ができれば、この地域における大学の存在感や役割もますます大きくなるのではないのでしょうか。

松田 酒造り体験事業(※4)を生物資源

「今までは連携することに意義があったのですが、これからは結果をどう出していくかが求められます」



松田直久
まつだなおひさ
津市長
大阪産業大学卒業
衆議院議員秘書、三重県議会議員を経て、2006年2月より現職



学部で学生さんにやっていただいたり、三重大学に「津市げんき大学」(※5)の分校をつくらせていただいたり、大学にはさまざまな形で街へ出てきていただき本当に感謝しております。ただ、市民からするとキャンパス内には一般の者は入れないのではないかと思います。なかなか踏みこんでいけません。行ったことがないし、何をしに行ったらいいのかわからないという方も多いと思いますので、市民が大学を訪れる機会を増やしていただくといった連携もあるのではないのでしょうか。また、津市にはスポーツ団体もあります

ので、スポーツを軸にした新しいコミュニケーションを企画し、人と人をつなげたら、もっといい形の連携の輪ができるのではないかと感じております。例えば、大学のスポーツクラブと市の体育協会がタイアップして子どもたちに教えるなど、そうした活動をやっていただいたらいいのではないかと思います。

内田 大学には三翠ホールやレイモンドホールもあります。ぜひ市民に向けたいろいろな催しを、市と大学が一緒になって行わせていただきたいと思っています。スポーツでの連携も面白いですね。大学の野球部や陸上部の学生が地域の子どもたちを指

「地域圏大学として地域に根ざし、 地元で貢献できる『人財』を育てることが 三重大学の重要な役割です」



内田 淳正
うちだ あつまさ
学長 医学博士
専門分野は、整形外科学

導することで子どもたちも成長できるし、学生たちも指導というプロセスを通して進歩することができるでしょう。また、社会人チームと一緒にプレイするなどいろんなチャレンジをすることが、学生にとっても地域にとっても役立ちます。市長のアイデアは非常にありがたく、とても参考になりました。

地域を愛する人を育てる 三重大学の人財育成

司会 大学の最も重要な使命は教育です。三重大学が目指すひとづくり、人材育成に

ついてお話しいただけますか。

内田 私はいつも、人は宝、人材の「ざい」は財産の「財」であるとメッセージを発しています。それは、やはり地域圏大学として地域に根ざし、地元で貢献できる「人財」を育てることが三重大学の重要な役割と考えているためです。既に教育界や医療界では三重大学出身者が中心的な役割を果たしてくれていますので、今度は地域企業や行政で活躍する人財をどんどん増やしていかなければなりません。そのためには三重大学を愛する愛校心を育てることで、それが県や津市に対する郷土愛にもつながり、

地元に残ってこの街を良くしていきたいという気持ちのもとになるのではないのでしょうか。地元が好きだからみんなで良くしていこうと行動する、そういう人財を一人でも多く育てたいと考えています。三重大学の学生は三重県出身者が4割、他県の出身者が6割いますが、三重県出身者は当然として他から来た6割の人にも、大学生活を通して郷土愛や愛校心を育んでいくことが我々の大きなテーマであると思っています。

松田 津市は合併後、新しい市民歌「このまちが好きさ」というポップでノリのいい歌をつくりました。今、学長が愛校心とおっしゃいましたが、私どももいろいろな方に自分の能力をこの街で発揮していただくには、この街が好きだという気持ちを持っていただくことが重要だと思います。先般、藤堂高虎公入府400年の記念事業を展開し、津城も再興しようと取り組みを進めていますが、この津市が中世には日本三津（三大港）の一つであったことや、市制施行も名古屋より早かったこと、藤堂高虎公や国学者の谷川士清などの偉大な人物を輩出してきたことなどを楽しい催しを通じて知っていただくことも、この街を誇りに思うきっかけになるはずです。行政の施策はもちろん必要ですが、もっと草の根から人々の心の中に「この街が好きさ」という気持ちを持っていただきたいと考えています。

行政と大学の連携の先に 地域再生の未来が見えてくる

司会 最後に、地域防災をはじめ大学と市との連携について今後の展望をお話しいただけますか。

松田 三重大学の先生方には以前から道路陥没や土砂崩れなどの災害調査にご

協力いただき、包括連携協定締結後は防災を軸に連携を高め合っています。今後、防災面はもちろんですが、例えば中小企業1社では先端的な研究ができないので研究の部分を大学にお任せしたり、技術と技術の接点となるアイデアをいただいたりするなど、産学官で地域を活性化するような新しい事業の創造を推進したいと考えています。もう一つは、環境に優しいまちづくりに対して専門分野からご指導をいただくこと。さらに国際化が進み、津市にも多くの外国の方が住んでいらっしゃいますので、そうした方がご家族で住みやすく、働き手としてのマンパワーが発揮しやすいまちづくりも必要です。その際、我々だけでは言葉の壁もありますので大学や学生さんの力をお借りしたいと思っています。今までは連携することに意義があったのですが、これからは結果をどう出していくかが求められます。そこを掘り下げて臨みたいと考えております。

内田 地域防災においては東海・東南

海地震に対して、大学も含めこの地域がどういう対策を立てていくかが非常に重要です。既に三重大学は津市と机上訓練を実施しておりますし、「美し国おこし・三重さきもり塾」(※6)を開校して地域防災を担っていただける人財の養成に取り組み、これから予測される大災害に備えています。「さきもり塾」で育った方が各自の地域に戻っていろいろな人に情報を提供し、意識を啓発し、地域ぐるみで防災に備えられるようにしたいと思います。国際交流においては海外の方を呼び込むために、津市の持つ観光資源や大学の持つ知財や施設などを組み合わせるなど新しい企画を打ち出して、それを地域再生やまちおこしに反映させていくことも考えられるでしょうね。

松田 津市の市民防災大学でも三重大学の先生にご指導いただいています。やはり防災においてもひとづくりがカギなのだろうと思っています。行政も専門的な意見を参考に安全・安心のまちづくりに取り組んでいきますが、市民の皆さんにも専門

家のお話をうかがって災害に対応できる準備をしていただく。こうした取り組みをいろいろな分野で実現するためにも、行政と大学の連携を当たり前のものにしていきたいと願っております。

内田 そのような防災面での連携活動は、すべての地域再生のモデルになるだろうと思っています。例えば医療も医療関係者だけ、行政だけの体制をつくるのではなく、市民が参加し一体となってその地域の医療体制をつくるのが欠かせません。安全で安心、そして誰もが住みやすい社会を支える基本単位を、どうやって行政と大学とが協力して形成していくか、それが今後の課題ではないでしょうか。本日は新しい連携のアイデアもいただき、津市と大学の未来に向けて非常に有意義なお話ことができました。今後さらに連携を深め、市とともに地域の課題の解決に向けて邁進したいと思っています。

司会 本日は楽しく有意義なお話を沢山いただき、ありがとうございました。

(※1) 10市町村の合併
旧津市、旧久居市、旧河芸町、旧芸濃町、旧美里村、旧安濃町、旧香良洲町、旧一志町、旧白山町、旧美杉村の10市町村が合併し、新「津市」が誕生。

(※2) つ・だいもん学生マルシェ
三重大学ベンチャーサークルを中心とする学生たちによるイベント。これまで地域活性化イベントの中で関わった地域の産物や加工品などを、大門大通りの商店街の空き店舗を活用して販売した。

(※3) 野村證券・百五銀行・創業革新プロジェクト研究室
三重大学と民間企業2社による大学発ベンチャー支援プロジェクト。メディカル・バイオ・アグリなどのベンチャー企業に対する戦略的な支援を研究し、選定企業に対して支援を実践している。

(※4) 酒造り体験事業
2007年より市内の造り酒屋と三重大学、津市が連携し、酒造り体験事業を実施。学生が社員の指導のもと酒造りに挑戦し、三重大学ブランドの梅酒や純米大吟醸も誕生した。

(※5) 津市げんき大学
「津を元気にするために何かしたいと思う人、活動する人」が集まるまちづくりの窓口。人のネットワークづくりや活動の支援、各種講座を展開している。三重大学は分校を開校し学生がまちづくりに参加している。

(※6) 美し国おこし・三重さきもり塾
文部科学省「地域再生人材創出拠点の形成」に採択された三重県との協働事業。地域の防災・減災活動を行う人材の育成・輩出を目指す。





人文学部准教授
石坂 督規

いしざか とく の り
修士(学術)
専門分野は、地域社会学

この記事に関連した情報は以下のアドレスでもご覧いただけます。
▶ <http://www.mie-u.ac.jp/links/research/>

右図／津の観光PRヒーロー「ツヨインジャー」。「津、良い」と「強い」とをかけたネーミング。(図2)



官と民、若者と高齢者が結びつく 持続的なまちづくりを目指して。

少子高齢化の時代、縮小しつつあるコミュニティを再生しようと日本各地で、官民協働のまちづくりの動きが活発化しています。三重大学は、津市の試みである「津市げんき大学」に学生たちが参画。人文学部では、官民学協働の持続的なまちづくりを目指し、学生と地域住民、行政とを結びつける取り組みにも挑戦しています。

元気な街の誕生

少子高齢化。最近、あちこちで目にする言葉です。日本の多くの地域では、この少子高齢化の進行に伴う人口減少が進みつつあると言われてます。人口減少は、コミュニティの崩壊、生活基盤の脆弱化につながるなどの懸念もありますが、反面、縮小しつつあるコミュニティや地域生活のあり方をあらためて考え直し、それらを現状に即した形に再編、再生させていく意欲的な取り組みも数多く紹介されています。かつてのように、大規模な事業で地域を潤すことは難しくなりましたが、ユニークな発想・アイデアをもった若者たちが、行政や市民団体、企業などと連携して、地域社会に新しい風を吹かせる、そんな元気な街が、今、数多く生まれつつあります。

津市を変えた「津市げんき大学」

私が本学に赴任し、津市の住民となった10年前、学生たちに「津といえば、何?」と問いかけると、「一文字の市」もしくは「三重の県庁所在地」と答える学生が大半を



津市内の飲食店で続々とメニュー化されている。取扱店には目印ののぼりが掲げられている。(図1)



藤堂高虎公入府400年記念事業マスコットキャラクター「シロモチくん」(図3)



津市美杉町を訪れ、地元の方々と懇談する「津市げんき大学三重大学分校」の学生たち。(図4)



尾鷲市早田町でのコミュニティ再生事業。学生たちが魚の仕分け作業を行った。(図5)

占めていました。それが最近では、「うなぎ」「津ぎょうざ」(図1)などのグルメ、さらには「ツヨインジャー」(図2)「シロモチくん」(図3)といったキャラクターまで出てくるようになりました。今思えば、これまでの津市のイメージを一変させたのが、「津市げんき大学」の誕生だったように思います。さまざまなプロジェクトや企画を官民協働で推進し、グルメの開発や普及、キャラクターやメディアを活用したパフォーマンスなどで、10市町村による合併直後の新しい津市を大いに盛り上げてきました。本学にも、三重大学分校が開校し、既に多くの学生がげんき大学の取り組みに参画しています(図4)。

官民協働のまちづくり

この「津市げんき大学」は、まちづくりの一つの例ですが、近年、こうした官民協働のまちづくりがあちこちで進められています。自治基本条例やまちづくり推進条例などを制定する自治体が増え、行政と市民とが協働して事業を行う体制が整えられたことや「新しい時代の公」「新しい公共」などの言葉に象徴されるように、公共的な部門において行政が市民の能力や経験を積極的に活用しようとしたことも、官民協働のまちづくりを推進する大きなきっかけとなったように思います。例えば、津市のようにご当地グルメやローカルヒーローが注目を集めている地域も、官民が協働してそれらを推進しているケースが多いと言えましょう。しかし、昨今の協働ブームですが、ただのブームで終わらせない工夫も必要です。官民協働というと聞こえはいいですが、反面、それを実践するのは大変難しくもあります。

「ヨコの連携」と「タテの連携」

「津市げんき大学」をはじめ、官民協働が持続的なまちづくりへと結びついているケースには、ある共通性があります。一つは、対等の原則。もう一つは、世代間連携です。官民が同じテーブルで対等に話し合えるような場を確保できるかどうか。そして、まちづくりを推進する組織の中に、特に大学生やフリーターなどの若い年齢層を取り込めるかどうか。つまり、官民という「ヨコの連携」と、世代という「タテの連携」とをうまく整合させられるかが、持続的なまちづくりの鍵であると言えます。現在、私の研究室では、三重県の尾鷲市、多気町、紀宝町の高齢化や人口減少の進む地域で、官民学協働のまちづくり、コミュニティ再生事業を進めています(図5)。また、本学のキャリア支援科目「まちづくり実践」を通じて、学生と地域住民、行政とを結びつける取り組みも進めています。ここでも、県や市町の見識と住民や学生たちのバイタリティとをどのように整合していくかが課題となっています。

縮小化社会の到来に備えて

少子高齢化は、確かに難しい課題を数多く含むものです。しかし、それをネガティブなものにとらえるのではなく、むしろ、少子と高齢とを連携させた新たなまちづくりへとつなげていく可能性をもったものと位置づけてみるのもよいかもかもしれません。これからの地域コミュニティは、人口においても、規模においても確実に縮小していくことになります。こうした縮小化社会のもとでは、例えば、これまで10人でしていたことを3人でしなければならなくなるわけです。役割や仕事を共有していくためにも、官民の、そして世代を超えた新たな協働、連携は不可欠です。まちづくりは、我々自らが、こうした社会の到来に備えて意識改革を図ることであり、また官民学協働の意義や手法を皆で考えることでもあると言えるのではないのでしょうか。「まちづくりは、ひとづくり」と言われますが、将来のまちづくりの担い手を育成・輩出する大学の役割も、今後ますます大きくなっていくことでしょう。



教育学部教授
富樫 健二

とがしけんじ
博士(医学)
専門分野は、運動生理学

この記事に関連した情報は以下のアドレスでもご覧いただけます。
▶ <http://www.mie-u.ac.jp/links/research/>

右図／地域発祥型健康づくりプログラム「ウエストメジャーリーグ」実施の様子(図2)



生活習慣病やメタボ予防に役立つ、 運動実践の効果を研究。

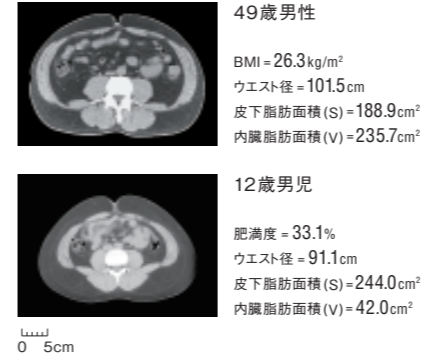
飽食の時代、運動不足もあって小児期からの肥満が問題となっています。教育学部では、子どもから成人までを対象に生活習慣病やメタボリックシンドローム予防に役立つさまざまな運動実践と、その効果について共同研究を進め、地域と協力したユニークな運動プログラムでも注目を集めています。

運動実践を通した生涯にわたる健康づくり

現在の日本は世界有数の長寿を誇り、高齢の方々の生きる力を感じることができます。一方、少子化が進み、満たされた環境で育ってきた現代の子どもたちは将来これまでのような健康長寿でいられるのでしょうか。健康維持における三条件は栄養・運動・休養と言われているように、現在長生きされている方々は子どもの頃、少ない栄養ながらもしっかりとからだを動かし、十分な休養も取れていたと考えられます。しかしながら現代の子どもたちは、食べ物こそ豊富にあるものの、遊び仲間や遊ぶ空間、遊ぶ時間など3つの「間」の減少によりからだを動かす機会が奪われ、その結果は昨今の「全国体力・運動能力、運動習慣等調査」による身体活動時間の短さや体力値の低下にも表れています。本研究室では生涯にわたる健康の基礎は運動実践を通したからだづくりにあると考え、子どもから成人までを対象とした生活習慣病やメタボリックシンドローム予防における運動実践とその効果について研究を進めています。



肥満小児のための運動プログラム



大人と子どもの腹部脂肪分布の比較(図1)

※アディポサイトカイン
脂肪細胞から分泌される生理活性タンパクの総称。複数の種類があり、そのバランスが生体にさまざまな影響を与えている。

メタボ予防は小児期から

ヒトは体内で余剰なエネルギーができた場合、脂肪として蓄える機構を身につけることで飢餓の時代を生き抜いてきました。ところが現代ではその機構が裏目に出て、過剰に蓄積した脂肪による健康障害が顕在化しています。本研究室は国立病院機構三重病院小児科との共同研究で、肥満小児の長期予後や腹部脂肪分布(内臓脂肪、皮下脂肪)、将来の動脈硬化と密接に関わるアディポサイトカイン[※]の動態、肥満改善に効果的な運動プログラムの作成などを行ってきました。その結果、小児期において肥満への対応が遅くなればなるほど、成人期へ肥満を継続する確率が高く、生活習慣病を発症しやすいこと、内臓脂肪が相対的に多い成人肥満と異なり、小児期の肥満では皮下脂肪が多いこと、量的に内臓脂肪は少ないにもかかわらず、糖尿病や動脈硬化に関わるアディポサイトカインと内臓脂肪が密接に関連していることなどを明らかにしてきました(図1)。一方、個人の体力特性に合わせた運動療法は内臓脂肪の減少やアディポサイトカインの適正化、体力値の向上をもたらし、低下していた自己効力感なども改善することから、運動が肥満の子どもの健康を取り戻す上で重要な役割を果たすことを訴えていきたいと思えます。

地域発祥型健康づくりプログラムに対する支援

社会連携研究センターの松井純教授とともに本研究室で支援している「ウエストメジャーリーグ」(図2)は、熊野市役所健康・長寿課が2007年から取り組み始め、昨年度は伊勢市においても実施された国内でもユニークな地域発祥型健康づくりプログラムです。メタボリックシンドローム予防を目的とした活動で、北米西(ウエスト)地区における野球のメジャーリーグと、腹囲(ウエスト)を巻き尺(メジャー)で測るといった意味を掛け合わせてキャッチコピーが作られています。地域住民が楽しく仲間とともに減量に取り組んで行くため3人一組でチームを作り、メジャーリーガーとなって成績を競います(図3)。3~6ヵ月間で目標体重まで理想的に減量を行えた場合、MVP賞などを授与します。本研究室では加速度計付き歩数計を用いた身体活動量評価や簡易型自記式食事歴法質問票(BDHQ)を用いた栄養解析を行って支援していますが、リーグ開幕時に比べ閉幕時の歩数やエネルギー消費量が上がっている選手ほど、また、エネルギー摂取量が減らしている選手ほど理想的な減量ができていました。通常、地域での健康づくり活動は高齢女性の参加率が高いのですが、ユニークなネーミングにより肥満が気になる壮年期の男性参加率が高く、また完遂率も高いのが特長です。これらの活動は多くのメディアにも取り上げられており、今後、他地域へも展開していくことによって健康づくりを通した地域活性化へつなげていく予定です。



くまのウエストメジャーリーグ開会式。チーム名もユニークなネーミングが多い。(図3)

地域観光資源を活かした健康ツーリズム

三重県は伊勢・鳥羽・志摩や熊野古道など多くの観光資源を有しています。こうした観光資源(旅行)と健康づくりを融合させ、地域住民や旅行者の健康増進や、まちおこしなどへつなげたいと考えています。ここ数年間は尾鷲市や尾鷲商工会議所、社会連携研究センターとの共同研究で世界遺産である熊野古道ウォーキング時のエネルギー消費量やリラックス効果を調べましたが、心肺機能の向上にふさわしい運動負荷がかかっていることや急性ストレス反応を評価できる唾液中アミラーゼ値の低減など、市街地でのウォーキングでは得られないようなリラックス効果も確認されています。将来的には生理的負担度までを標記した熊野古道ウォーキングマップの作成や和歌山県側古道との連携などを計画しています。



熊野古道ウォーク時のエネルギー消費量調査



大学院工学研究科准教授／
美(うま)し国おこし・三重さきもり塾副塾長
浅野 聡

あさのさとし
博士(工学)
専門分野は、都市計画、景観計画、協働型まちづくり、防災まちづくり

この記事に関連した情報は以下のアドレスでもご覧いただけます。
▶ <http://www.mie-u.ac.jp/links/research/>

右図／東海道関宿「百六里庭」
(三重県さわやかまちづくり賞【景観部門】受賞)(図1)



地方都市再生のための協働型まちづくり・ひとづくりプロジェクトを実践する。

人口減少や高齢化により、中心市街地、郊外市街地とも衰退が進む中地方都市には、都市計画の方針転換が求められています。工学研究科では、地方都市再生のために市民や行政と協働でまちづくり・ひとづくりプロジェクトに取り組み、都市計画の策定や人材育成などにおいて、多くの成果を上げています。

「20世紀都市」から「21世紀都市」への転換

21世紀に入り、現在の地方都市は、人口減少、少子化社会、高齢社会、地球環境、自然災害、地方分権といった厳しい社会状況の変化に直面し、新たな対応が求められています。

20世紀の成長時代には、郊外に拡大する数多くの開発プロジェクトが実践されましたが、その総量をコントロールしなかったために、人口や都市機能の分散化を招きました。かつては活気があった中心市街地は、住宅や店舗、病院など諸施設の郊外移転に伴い人口が減少し、深刻な衰退問題に直面しています。また、開発されてからしばらくは活気があった郊外市街地も、将来の人口減少や高齢社会への配慮を欠き、高齢者の生活支援のための医療、福祉、買い物、交通などに関わる諸機能が未整備であったため、老夫婦世帯が急増する中で日常生活に支障が出始めるなど、中心市街地と同様に衰退の危機を迎えつつあります。

このような状況の中で都市計画の最前線で求められているのは、郊外に拡大し続け



伊勢河崎商人館(国登録有形文化財)(図2)



伊勢都市マスタープラン市民ワークショップ
(まちづくりブックの活用の様子)(図3)



左:まちづくりブック伊勢(学芸出版社)
右:まちづくり極意くわな流(中日出版社)(図4)



地域防災学総論Iの講義風景(図5)

た「20世紀都市」から、人口と都市機能を中心市街地に再び集約する「21世紀都市」へと方針転換していくことです。

地方都市再生に向けて、まちづくりの3つを変える

それでは、「20世紀都市」から「21世紀都市」へと方針転換させるためには、何を变えていけばよいのでしょうか。わかりやすく捉えると、まちづくりの3つを変えることが重要であると考えています。

第一に「うつわ」を変える。拡大しすぎた街を、人口減少に対応させて段階的に小さくすることです。既に採算のとれないロードサイドショップやファミリーレストランが閉店され始めており、郊外がゴーストタウン化する前に計画的に縮小することが求められています。第二に「なかみ」を変える。計画内容の質を見直し、経済性や効率性のみを重視するのではなく、歴史・文化・景観・福祉・環境・防災といった視点をまちづくりの計画に復権させ、環境破壊せずに住み続けることのできる質の高い居住環境として再整備することです。そして第三には「プロセス」を変える。従来型の密室の計画と言われないように情報公開し、より広い合意形成のもとで、市民、企業、専門家、行政による協働型まちづくりとなるように、そのプロセスや方法を変えることです。

まちづくり・ひとづくりプロジェクトを実践する

前述の基本方針のもとで、本研究室では主に三重県や県内の市町からの依頼を受け、質の高い総合的な居住環境づくりにつながることを意図したまちづくり・ひとづくりプロジェクトを実践しています。

具体的には、桑名市、亀山市、伊賀市、津市、松阪市、伊勢市、鳥羽市、志摩市、名古屋市などにおいて、集約型都市構造を目指す都市計画マスタープランの策定、城下町や門前町の歴史を持つ中心市街地における文化財や町並み保全のための景観計画の策定、中心市街地における防災・福祉・景観に配慮した都市施設(道路・公園)の整備計画の策定、三重県景観計画に位置づけられた眺望景観保全計画の策定などに取り組んでいます。また、実現した公共事業としては、東海道関宿において防災公園として設計した「百六里庭」(三重県さわやかまちづくり賞【景観部門】受賞)(図1)、村民主体による農村景観整備に取り組んだ「大山田村地域づくり景観整備事業」(国土交通大臣表彰まちづくり功労者受賞)、城下町の散策路を整備した「上野市ウォーキングトレイル事業」、町屋をまちづくり拠点として再生した「伊勢河崎商人館まちづくり舞台」(図2)、城下町の駅前再開発として取り組んだ上野市駅前地区再開発事業などが挙げられます。また、ひとづくりプロジェクトとしては、上述の各種計画づくりの現場を市民参加による公開ワークショップ(図3)として位置づけたり、人材育成に必要なまちづくり学習の教材「まちづくりブック」の編集に関わっています。「まちづくりブック」は、伊勢市と桑名市からの依頼を受け、それぞれ『まちづくりブック伊勢』(学芸出版社)、『まちづくり極意くわな流』(中日出版社)として編集、刊行しています(図4)。

巨大地震対応の防災・減災活動の人材育成プロジェクト

現在取り組んでいる大きなひとづくりプロジェクトとしては、「美し国おこし三重さきもり塾」があります。これは東南海地震などに代表される自然災害への対応が求められる中、三重県の防災・減災活動を担う人材育成のための教育・研究を行う場として、工学研究科内に特別課程を設けたものです。今年度は、特別課程生として19名、入門コース生として47名が入塾して学んでおり、1年後には全員が無事に卒業することを期待しています(図5)。



大学院生物資源学研究科准教授
内山 智裕

うちやまとひろ
博士(農学)
専門分野は、農業経営学、農業経済学

この記事に関連した情報は以下のアドレスでもご覧いただけます。
<http://www.bio.mie-u.ac.jp/~uchiyama/>

右図／茶葉の収穫作業



持続的農業経営と 食の安定供給の確立に向けた戦略づくり。

後継者不足や食料自給率の低迷など、困難な問題が山積し、日本の農業はかつてない難局に直面しています。生物資源学研究科では、農業経営の継承や地域資源を活かした農業の発展、国家戦略としての食料調達に注目し、農業再生の戦略づくりに取り組んでいます。

農業再生には個別経営・地域農業・国家戦略の視点が不可欠

農業従事者の高齢化、後継者不足、食料自給率の低迷、耕作放棄地の増加など、日本の農業には多くの問題が表出しています。人材や農地は農業に不可欠の資源ですが、農業の収益性悪化を起因とした人材不足が、農地の潰廃など生産基盤の劣化へとつながり、それがさらなる収益性の悪化を招く悪循環に陥っているのです。この負の連鎖を断ち切るために、第一に個別経営、第二に地域農業、第三に国家戦略の観点から、農業再生の戦略づくりの理論と実践に取り組んでいます。

家族経営協定と経営継承

これまでの農業政策は、医療に例えれば、どんな薬を打つか、その薬にどんな効果があるかに終始してきましたが、これから必要なのは個々の農業経営が、より健康に



家族経営協定の調印式へ参画(図1)



米国アイオワ州における非親子間の
養豚経営継承の取り組みを調査(図2)



農産物直売所(松阪)の様子(図3)



豊作のため野積みになったとうもろこし
(米国中西部)(図4)

なるために自己鍛錬することです。

家族経営協定とは、農業に従事する家族が経営の目標や営農計画、役割分担、就業条件や将来の経営移譲などを話し合い、書面化するものです。農業経営の大半が家族経営とはいえ、農業ビジネスを営んでいる以上は目標・計画を立てて実行・自己点検し、経営改善につなげることが重要です。そこで家族経営協定の締結支援や経営改善・経営継承の円滑化効果の検証を行っています(図1)。

また、優良な農業経営が後継者を確保できずに廃業すれば、社会全体にとっても損失です。そこで、後継者不在の農業経営を、意欲を持つ新規参入者に継承させる「マッチングプログラム」の開発・普及に取り組んでいます。これは、米国の一部の州で実施されてきたプログラムを日本流にアレンジしたものです(図2)。親子間でない経営継承には制度面・心理面などで課題も多く、継承ノウハウの蓄積と学術的な理論の構築により支援をしていきます。

地域農業や農産物直売所の戦略づくり

農業経営は個々に独自性を持ちながら、ほぼ同一の自然条件と社会経済条件の下で地域農業を形成しています。卸売市場流通や政府の保護政策などの既存の体制が変化していく中、地域ごとに農業の発展戦略を構築することが重要になります。例えば、鈴鹿市の主要産品である茶・植木は需要の低迷に直面しており、新たな産地戦略が必要です。また、すべての水田を主食用の稲作に活用できない現状では、麦・大豆作を通じた農商工連携、飼料をはじめとする新規需要用コメ作りなど、通常の稲作+αの水田経営の確立が求められます。そこで現在、鈴鹿市や三重県と連携して、農業基本計画や農業再生プラン作りに取り組んでいます。

また、地元農産物を地域住民に販売していくチャネルの一つとして定着しつつある農産物直売所も、現在は消費者にとっては新鮮・安価な農産物を購入できる場、生産者にとっては新たな所得獲得の機会となっていますが、その運営は必ずしも磐石ではありません。新鮮・安価にとどまらない農産物直売所の発展戦略の策定についても、JA三重グループと連携しながら取り組んでいます(図3)。

食料調達に関わる企業行動の解明

我が国の供給熱量ベースの食料自給率は約4割です。4割という数字が目まぐるしく下がっていますが、自給率10割が現実的でない以上、残りの6割にも着目する必要があります。すなわち、諸外国における食料生産・流通の動向把握の重要性です。残り6割の約半分、全体の約3割は米国とカナダからの輸入です。具体的な品目としては穀物と油糧種子が挙げられます。そして、その輸入業務は数社の総合商社によって担われていますが、穀物・油糧種子事業が各商社の全事業に占める割合は極めて低いのが実情です。極論すれば、我が国における食料供給は、それが「さほど重要ではない」主体により担われる、といった構造の上に成立しているのです(図4)。

北米における各商社の穀物調達は、調達方法・流通経路・保管施設の保有や提携先の選択などに違いが見られます。また、北米では遺伝子組み換え(GM)作物の作付割合が上昇しており、今後、非GM作物の確保が困難になることも予想されます。これらの情報は、我が国が北米地域と経済連携協定(EPA)／自由貿易協定(FTA)などを締結する際に不可欠となると想定して、アグリビジネスの企業行動について農林水産省の委託を受けながら調査分析を進めています。

CLOSE-UP Interview

堀 浩樹 大学院医学系研究科教授

三重県に愛着を持ち
地域医療を支えていく
医者を育てたい。

三重大学医学部医学・看護学教育センターでは、医学教育を通して新しい地域医療の形を築こうと、さまざまな活動を展開している。センター長として取り組みを推進するのは、大学院医学系研究科の堀浩樹教授。その原点には、小児科医としてキャリアを積み、海外での医療協力プロジェクトにも携わりながら、ずっと抱いてきた地域医療への想いがある。地域の人々に注がれる教授のまなざしは、優しいぬくりに満ちている。



センター内には、ミーティングなどで学生たちが自由に使える部屋も。



小児科医として経験した子どもの死やアフリカの日々について語る。

小児科医としての出発

豊かな自然に恵まれた三重県は、その半面、山間や海辺の小さな村の医療過疎が問題となっている。大学院医学系研究科の堀浩樹教授も、そんな医療過疎地の出身だ。幼い頃から地域の現状を肌で感じ「将来は地域医療を担う医者になろう」と三重大学医学部へ。しかし、小児白血病の診療と研究で最先端を走っていた小児科に興味を持ち、「子どもたちの命を、がんに奪われてはならない」と医学部附属病院で小児科医への道を進む。卒業後しばらくは、大学から派遣された各地の病院で勤務。毎晩呼び出しコールに駆けつけたり、1日置きに当直を担当したりとハードな日々を送る。しかし、教授は「救急患者さまが次々に運ばれてくるような現場でいろいろな経験をし、小児科医としての力をつけさせていただいた」と振り返る。

アフリカで学んだ地域医療の原点

転機は、小児科医になって7年目、大学に戻って程なくのことだった。三重大学はその前から国際協力機構（JICA）のプロジェクト

に協力し、アフリカ各地の病院へ医師を派遣していたが、教授も西アフリカのガーナ大学野口記念医学研究所へ客員研究員として派遣されることになったのだ。現地へ渡った教授は、首都から1時間程の農村で一次診療に従事。公衆衛生の改善のために衛生教育や予防接種なども行い、活動による改善状況を分析するなど研究活動にも取り組んだ。「人口動態を把握するにも戸籍がないので、地域の地図を作り、そこに一軒一軒、家を書き込んで聞き取り調査を行うことから始めました」。人もいない、お金も病院もないアフリカの地域の問題は、日本の地域が抱える問題にも通じる。現地での地道な作業は、教授にとって地域医療の原点を学ぶ機会ともなった。

地域医療教育を推進する拠点として

三重大学医学部では、標準的な医学教育に加えて、国際性と地域性に重点を置いた独自教育を展開している。例えば国際性については、医学部6年生を1ヵ月間、アフリカをはじめ各国の病院に派遣する海外臨床

実習（※1）を行い、学生の意欲向上など大きな成果につながった。また、ここで明らかになった語学力不足などの課題を解決するため、去年から1、2年生を対象に1週間の海外医療体験を実施。今年は臨床現場で使う医学英語のトレーニングを始め、海外からの遠隔授業も予定される（※2）。こうした教育の国際化には、教授の海外での経験が活かされている。一方、地域性については、三重県の医療を担う人材育成の拠点として、地域と連携した多様な活動を展開している。これらの医学教育を統括するのが、医学・看護学教育センターだ。教授は昨年、センター長に就任。指導体制を強化し、現在は新たな地域医療教育の構築に向けて、意欲的な活動を展開している。

地域に愛着を持たせる教育を

新たな地域医療教育の目玉の一つが、1、2年生を対象にした、地域での保健教育プロジェクトだ。その内容は、例えば赤ちゃんが高熱を出したときにどう対処したらいいのか、など地域の人々にとって身近な問題をテーマに、

学生が自分たちで調べた結果を市町村と協力した保健教育の場で発表するというもの。教授の言葉によれば「地域の人々と対話することにより、その期待を学生の心に直接響かせるような活動」に力を入れている。また、3、4年生には、地域病院へ応援に行く教員に同行させることで、当直や救急医療も含めた医療体験学習の機会を提供。5、6年生には大学病院だけでなく、地域の病院とも連携して臨床実習を行っていく予定だ。「6年間一貫して地域と連携し、地域に愛着を持たせるような教育を構築していきたいと考えています」

卒前から卒後まで支援していく

教授は、センターの将来構想として自身の希望を語る。「医療過疎地から受け入れた地域枠の学生が、卒業後、地域に貢献できるように卒後臨床研修部や地域と連携して支援していくことが必要です。そのために、卒前だけではなく卒後も含めた人材育成活動に取り組んでいきたいです」。医学教育を通して、「能力のある医者を育てたい、

心のある良医を育てたい、そして、三重県に愛着を持って地域医療で活躍してくれる医者を育てたい」と教授。地域医療を支えたいという使命感は、大学入学当時と少しも変わってはいない。

休みのない日々が続く教授だが、その息抜きとなっているのが自宅で飼っている魚たちだ。「うなぎの稚魚にドジョウにナマズ…。家族には嫌がられますが、子どもの頃、田舎でよく捕っていたんですよ」。センター長になってやっと初心に近づけた、と微笑む教授。地域医療を担う人材を育て、少しでも地域に貢献したいという熱意が、人々の心を動かす三重県の医療の未来を支えていく。

※1 海外臨床実習

この取り組みは「海外医学部と連携した臨床医学教育」として、2006年度、文部科学省の特色ある大学教育支援プログラムに採択された。

※2 海外医療体験・医学英語・遠隔授業

これらの取り組みは「保健医療の国際化に対応する医学教育」として、2009年度、文部科学省の大学教育・学生支援推進事業【テーマA】大学教育推進プログラムに採択された。

堀 浩樹 ほりひろき
大学院医学系研究科教授
専門分野は、小児科学、
血液腫瘍学、国際医療協力



新生児室の様子
タンザニアの国立病院に赴任し、新生児室の問題点を調査したことも。



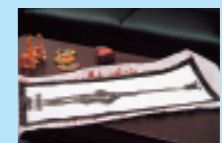
カンファレンス
今後の方針をスタッフと共有し、活動を進めている。



地域医療の原点
ガーナの農村で地域の人々を診療。ときには部族語でコミュニケーション。

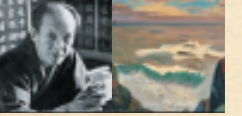


七里御浜
故郷にある美しい海岸。うなぎの稚魚を捕って遊んだ。



アフリカの思い出
研究室は、さまざまなアフリカの工芸品で飾られている。

知られざる
三重にまつわる
文学・美術を
紹介します。



「ある晴れた日に」、「日記」などの直筆原稿と代表作『暢気眼鏡』、『すみっこ』。(三重県立図書館蔵)

CHRONICLE OF MIE VOL. 6

【文学編】

尾西 康充 おにし やすみつ
人文学部・文化学科教授
専門は日本文学

作家・尾崎一雄。日本文学における私小説の主脈。日本文学の特徴とされる私小説の代表的な作家、尾崎一雄。幼少の頃、伊勢で過ごした思い出を、軽妙に綴った作品には、どんな苦境もユーモラスに描き出す独特の作風が息づいている。

日本近代文学を最も特徴づけるものは私小説の手法である。作者が一人称の視点から自分が体験した出来事を、いささか自己暴露的に描き出す方法は、たとえどのように恥ずかしい事柄でも、読者の前では、ありのままに告白するという作者の“誠実さ”を前面に押し出すことになった。この“誠実さ”によって多くの読者は、主人公と作者とが同一人物で、作品の中で語られた事柄は、すべて作者の身の回りに実際に起こった出来事として無条件に受け入れるという作品享受の傾向が形成されてきた。

このような私小説を描いた代表的作家が尾崎一雄であった。尾崎は明治32年(1899)12月25日、神宮皇學館教授を勤めていた父八束と母タイの長男として、三重県度会郡宇治山田町(現在の伊勢市)大字浦五十番屋敷に生まれる。父の家系は祖父の代まで神奈川県小田原市下曾我にある宗我神社の神官を務めていた。4歳のときに一旦は下曾我に帰るが、7歳で父とともに再び伊勢に戻って明倫小学校に入学して、翌年まで在学した。尾崎の伝記的小説『父祖の地』(昭和10年/1935)には、「私が生まれたのは、宇治の五十鈴川のほとりだが、母が妹セイ子をつれ下曾我に帰ると共に、父と私は、山田の岡本町に移った。今、某代議士の邸になつてゐるが、当時参宮館、相当の旅館でその離れ二間を借りた。南向きで、広い芝庭園、向うが掘割で画られていた。掘割には蘭が生ひ揃ひ、青々

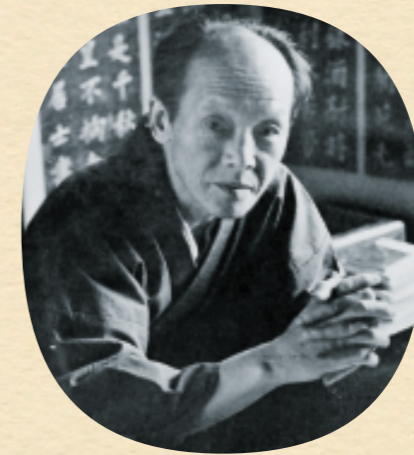
と丈高い^{いぐさ}蔭には、蜻蛉^{トンボ}の脱殻がしがみついていた」とある。

この引用の中で尾崎が「某代議士」と呼んでいるのは、衆議院議員の浜田国松のことである。三重師範学校(三重大学教育学部)を卒業して一旦は小学校教員を務めていた浜田は、弁護士資格を取得した後、三重県郡部選挙区から衆議院議員選挙に選出され、軍部の政治干渉を批判した「腹切り問答」で日本憲政

拝客の宿泊に使われていた建物であった。

『父祖の地』には、伊勢に住んでいた幼少の頃の思い出がいくつも語られている。父が凧を作ってくれたり、絵を描いたりしてくれたこと、皇學館の学生が持参してくれた菓子折を、父が「食べていいもの」と「食べていけないもの」とに分け、「食べていけないもの」はすぐに旅館の人たちにあげていたこと、父が岩淵町の碁友だちのところに遊びに行ってしまう、お守をしてもらっていた旅館の女性主人に、鼻くそを飛ばしたこと、二見ヶ浦で小船に乗ろうとして船のへりに股間を痛打してしまったことなど、日常生活のありふれた風景が点描される。

苦々しいことや恥ずかしい体験であっても、尾崎の筆にかかると、腹立たしさや諦念をまじえた少々ユーモラスなものに転じてしまう。尾崎は神奈川県立第二中学に在学していたとき、志賀直哉の『大津順吉』に衝撃を受けて作家を志すようになったが、志賀の人道的な作風を自己のものにすることができず、また昭和文壇で隆盛を極めていたプロレタリア文学のような社会批判の視点も持つことができなかった。だが32歳のとき、13歳下の山原松枝と結婚してからは、自由闊達の境地に目覚め、昭和12年(1937)に芥川賞を受賞した短編集『暢気眼鏡』に示されるような、貧しさや病気などの苦境に立たされていても、『暢気な眼鏡』を通して、それらをユーモラスに描いてみせるという独特の作風を確立させた。



尾崎 一雄 おさき かずお

作家
1899年~1983年

明治32年(1899)12月25日~昭和58年(1983)3月31日。神奈川県小田原市で育つ。早稲田大学文学部国文科卒業。『暢気眼鏡』で芥川賞を受賞し、文壇に認められた。代表作は『虫のいろいろ』、『すみっこ』、『まほろしの記』(野間文芸賞受賞)、『虫も樹も』『あの日この日』など。昭和39年(1964)に日本芸術院会員に選ばれ、昭和53年(1978)に文化勲章受章。

史に名をとどめることになった。他方、岡本町の「参宮館」とは、江戸時代の伊勢神宮の御師の館のことで、全国から集まった参



芥川賞を受賞した『暢気眼鏡』。発行年によって様々な装丁がある。(三重県立図書館蔵)



文化勲章受賞記念として岩波蔵松氏に送った尾崎一雄直筆の色紙。(三重県立図書館蔵)



下曾我にあった尾崎邸。現在は小田原文学館の敷地内に移築されている。(小田原文学館提供)



三重師範学校卒業の衆議院議長・濱田国松顕彰碑。反ファシズムの姿勢を貫き、憲政史上屈指の名演説をした。



昭和7年(1932) 油彩・キャンバス 73.3×100.4cm 三重県立美術館蔵

CHRONICLE
OF MIE
VOL.6

【美術編】

山口 泰弘 やまぐち やすひろ
教育学部・美術教育講座教授
専門は江戸時代絵画史

大王岬に 打ち寄せる 怒濤

現在の三重県立津高等学校で
図画教師として勤めていた藤島武二。
上京し、近代洋画界で頭角を現すと、
欧州で学び、新たな画風を確立する。
広大無辺な海原を描いた本作には、
その変化が見てとれる。

その頃の私の境遇は、老母と、兄弟をひかえていて、徒食しているのを許さない有様でありましたので、図画の教員となって三重県の中学に赴任することになりました。

藤島武二は、「私の学生時代」という一文に、このように回想を綴っている。鹿児島生まれで、当時東京にいた藤島が図画の助教諭として赴任したのが三重県尋常中学校、現在の三重県立津高等学校で、明治26年(1893)7月のことであった。赴任前の春、藤島は「桜狩」という油彩画を明治美術会第5回展に出品して、雑誌『めざまし草』で森鷗外に称賛されている。この作品は安田善次郎に買取られたものの生活は苦しく、それが奇しくも三重県との所縁を生むこととなった。

明治26年という年は、日本の近代洋画史に画期をもたらした年として記憶されている。フランスに留学していた黒田清輝(1866~1924)が、印象派の画風を携えて帰国し、古風な主題や画風を墨守する明治美術会の洋画家たちに大きな衝撃を与えたからである。黒田の帰国は、近代洋画のその後の航路が大きく舵を切る契機となったばかりか、藤島の将来も左右することになる。

黒田の帰国の影響は、明治29年(1896)5月に東京美術学校に西洋画科の新設、同年9月の白馬会の結成となって現れた。同郷で、面識はないものの滞仏時代に藤島と書簡の往復のあった黒田は、藤島を西洋画科の助教授(当初助手)として推挙する。その理由を黒田は、「私知って

いる人の内では、藤島君が一番洋画が巧まかったから」と語っている。こうして足掛け4年ほどの短い三重在住は終わる。この間の経緯を黒田は同じ年の日記に、「午後天真道場二画を直し二行た 又三重の藤島へ学校の助手ニならぬかと云事を云てやつた」(7月2日)、「今朝三重の藤島から承知の返事が来た」(7月5日)と、淡々と記すのみだが、藤島のほうはというと、7月8日の書簡で、「万事非常之尽力感謝之至に不堪 中学校に於



パリ留学時代の藤島武二

藤島 武二 ふじしま たけじ
1867年~1943年

洋画家。鹿児島県生まれ、当初、松岡寿・山本芳翠らに学んだ。三重県尋常中学校(三重県立津高等学校)で教鞭を取った後、黒田清輝に招かれて東京美術学校助教授のち教授。白馬会に参加。日本洋画界の中心的存在となった。代表作に、「天平の面影」「芳蕙」「黒扇」「大王岬に打ち寄せる怒濤」など。

而も此際容易に転任を許さなだか漸くやつつけてしまつた」と胸のたかぶりを抑えかねている様子がかげがえる。

上京は、人生の転機になったばかりか、画風も一変させることになる。「桜狩」にみられた旧派(藤島が当初出品していた明

治美術会は黒田とそのグループの登場でこう呼ばれるようになる)の伝統的な題材と薄暗い色調は払拭されて、明るい外光のもとに輝く小景や陽を浴びて遊ぶ人物が主題となる。黒田を中心としたグループは、新派あるいは外光派と呼ばれるようになり、藤島はその中で頭角を現す。

下って明治38年(1905)、38歳のフランス・イタリア留学は、藤島の画をさらに一変させる。とりわけイタリアで、明るい陽光の下に息づく自然を大胆な筆さばきで描くことを学んだ成果は、藤島の後期の画風展開を決定づけた。その里程標の一つが、V字に大きく開かれた断崖から広く太平洋を見わたす「大王岬に打ち寄せる怒濤」(三重県立美術館蔵)である。

宮内省から御学問所を飾る画の制作を委嘱された藤島は、テーマを「旭日」に決めて、昭和3年(1928)から取材旅行を始める。10年にわたって全国を巡り、果ては内モンゴルにまで赴くことになるが、昭和5年(1930)に旧懐の地である三重県に来て、志摩半島にある大王崎(※)で風景を描いた。2年後、第13回帝国美術院美術展覧会に出品している。

この画には、横幅を数センチ縮めただけで、一見違いの分からない姉妹作(ひろしま美術館蔵)がある。しかし、沖を行く船を水平線にまで遠ざけ、崖にしがみついた松をわずかに上に移すというほんの小さな操作ひとつで、空間を一気に広大無辺に広げることになった本作は、藤島の構図感覚の卓抜さを示している。

※地名としては、「大王崎」であるが、作品名として藤島は「大王岬」を当てている。なお当地のランドマークとして知られる灯台は、「大王崎灯台」と表記される。



【左】藤島武二「桜狩」(明治26年/1893)。関東大震災で焼失したが、20代後半の若い藤島の旧派時代の作風をうかがい知ることのできる貴重な作例。

【中】大王崎灯台と、眼下に広がる太平洋。

【右】北川民次(1894~1989)「海への道」(昭和17年/1942 三重県立美術館蔵)。大王崎のある漁村渡切は、大正時代、志摩半島の玄関口である島羽まで鉄道が延伸して以来、全国各地から多くの画家が訪れた。北川民次もその一人で、家並みと自然が複雑に入り込む景観にインスピレーションを得ている。

知的財産統括室

三重大学の発明者人口を拡大し、研究成果を社会へ還元する。

知的財産統括室は、三重大学の知的財産の創出・保護・活用を行い、教職員や企業などを対象に知財意識の啓発にも取り組んでいます。今後も発明者人口を拡大し、研究成果の社会への還元に努めています。

法人化とともに様変わりした国立大学のシステムの一つとして、教職員の発明の取り扱いが挙げられます。法人化以前も教職員が発明を行うことは珍しくありませんでしたが、出願人(=権利を有する者)は教職員個人または共同研究先の企業になっていました。法人化以後は、教職員の発明は機関管理(原則として機関帰属)となり、大学が出願人(または企業などとの共同出願)となることで、企業などへの単願特許のライセンス提供、あるいは共同出願企業の特許の利用により、教職員の研究成果が社会へより早く還元される仕組みになっています。

このような背景の中、2004年4月、国立大学法人三重大学知的財産統括室は設置されました。主な活動は次の通りです。

(1) 知的財産の創出

国立大学法人三重大学社会連携研究センターと連携した、教職員の新規発明・共同研究の掘り起こし

(2) 知的財産の保護

- ① 教職員からの発明届出や相談に基づく発明内容のヒアリングと先行特許文献調査
- ② 教職員からの発明に関する特許明細書の作成と特許庁への出願、権利化へ向けた拒絶理由通知対応(一部、特許事務所と共同)
- ③ 企業などとの共同研究契約、特許共同出願に関する契約交渉と契約書の作成

(3) 知的財産の活用

株式会社三重ティーエルオーと連携した、出願済み特許の企業などへのライセンス

(4) 知財意識の啓発

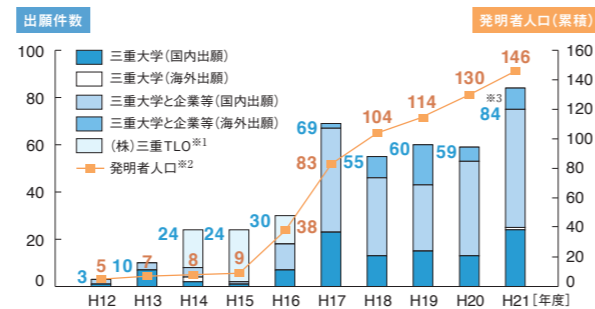
教職員、大学院生、および地元企業を対象としたMip(Mie intellectual property)特許塾の開催

以上の成果として、2004年度以降、特許などの出願件数が急増し、その後も増加傾向にあります(図1)。2000年度~2009年度の発明者人口は累計146名に上り、今後も発明者人口の拡大および教職員の知財意識高揚のため、啓発活動を継続していく予定です。一方、法人化から約6年を経て、産業界から熱烈な引き合いのある特許が出願され始めたことにより、ライセンス収入も1,000万円を超え(図2)、全国で19位に位置しています。



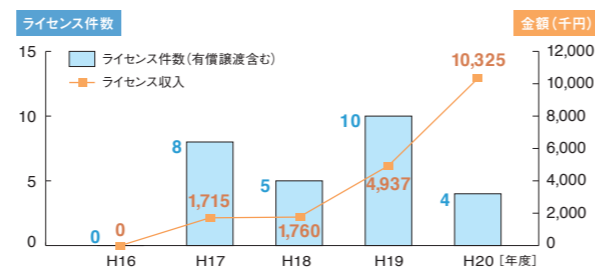
創造開発センターは平成21年4月、社会連携研究センターに名称変更。

図1 三重大学における特許等出願件数の推移



※1 企業等との共同出願を含む ※2 出願人が三重大学 ※3 平成22年2月19日現在、予定含む

図2 三重大学におけるライセンス件数および金額の推移(平成21年3月末日現在)



三重大学知的財産統括室

http://www.crc.mie-u.ac.jp/chizai/

お問い合わせ先

TEL/FAX:059-231-5495 E-mail:chizai-mip@crc.mie-u.ac.jp

T O P I C S

三重大学の研究と研究活動を通じた社会との連携

三重大学は教育と研究の成果を社会に還元するために、産業界や地域の公共団体との共同研究等の連携活動を推進しています。大学は、この連携によって、地域の文化の向上や活性化に貢献していきたいと考えています。

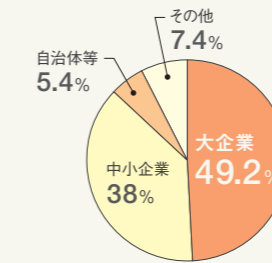
◎平成22年度共同研究の分類

共同研究総計

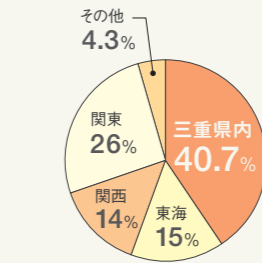
件数 258件

金額 4億7,712万6,747円

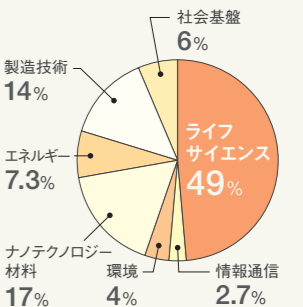
[共同研究相手先の規模等]



[共同研究相手先の所在地]



[共同研究の分野]



◎平成22年度大型研究(1,000万円以上の共同研究、受託研究)

| 事業名 | 研究題目 | 契約相手方 | 学部等名 | 研究代表者名 |
|---------------------------------|---|----------------------------|----------|--------|
| ○次世代自動車用高性能蓄電システム技術開発 | ○次世代自動車用高性能蓄電システム技術開発 | ○独立行政法人新エネルギー・産業技術総合開発機構 | 工学研究科 | 今西誠之 |
| ○次世代技術開発 | ○次世代技術開発 | | | |
| ○リチウム空気二次電池用リチウム—固体電解質複合負極の研究開発 | ○リチウム空気二次電池用リチウム—固体電解質複合負極の研究開発 | | | |
| ○戦略的創造研究推進事業 | ○糖代謝恒常性を維持する細胞の形態学的解析 | ○独立行政法人科学技術振興機構 | 医学系研究科 | 溝口明 |
| ○平成22年度地域科学技術振興事業補助金事業 | ○高効率光・パワーデバイス部材の開発 | ○財団法人科学技術振興財団 | 工学研究科 | 平松和政 |
| ○重点地域研究開発推進プログラム | ①アコヤ貝のミトコンドリア活性を指標として効率的選抜育種技術の開発 ②アコヤ貝の効率的挿核手術支援技術の開発 ③アコヤ貝のキャッチ収縮解明による育種支援技術の開発 | ○三重県(独立行政法人科学技術振興機構からの再委託) | 生物資源学研究科 | 古丸明 |
| ○生物系産業創出のための異分野融合研究支援事業 | ○ヤマリンの各種誘導体の分子設計と合成 | ○文部科学省 | 生物資源学研究科 | 今井邦雄 |
| ○都市エリア産官連携促進事業(発展型) | ○次世代全固体ポリマーリチウム二次電池の開発 | ○財団法人三重県産業支援センター | 工学研究科 | 武田保雄 |
| ○先端計測分析技術・機器開発事業 | ○ハイスループットタンパク質生産システムの開発 | ○独立行政法人科学技術振興機構 | 生物資源学研究科 | 田丸浩 |

(2010.04.01現在)

◎平成22年度地域貢献活動支援一覧

全学で地域貢献活動に取り組んでいます。この地域貢献活動の創造および推進を目的に、本学の職員を代表者とする教育・研究に基づく自主的な活動を「三重大学地域貢献活動」として助成支援していきます。

| 所属 | 氏名 | 活動テーマ |
|--------|-------|--|
| 人文学部 | 塚本明 | 大学・市民連携による持続的地域文化運動の構築～奥熊野の山村・湯谷村文書の調査と活用～ |
| 人文学部 | 朴恵淑 | 町屋海岸を軸とした三重大学の社会的責任(USR)～町屋海岸モデルの確立及び運用～ |
| 人文学部 | 石阪督規 | NHK大河ドラマ「江～姫たちの戦国～」に関わるまちづくりシンポジウム |
| 人文学部 | 児玉克哉 | 三重県における総合病院とかかりつけ病院を結ぶ地域病診連携支援システムの導入支援 |
| 教育学部 | 魚住明生 | 地域の子どもたちへの科学技術啓蒙活動—ロボコン体験教室の開催を通じて— |
| 教育学部 | 雷樫健二 | 「ウエストメジャーリーグ」実施による地域住民の健康づくり活動 |
| 教育学部 | 姉崎弘 | 三重県における特別支援教育の理解推進と教職員の専門性の向上 |
| 教育学部 | 藤田達生 | 藤堂高虎と藤堂藩に関する研究の発表と公開 |
| 工学研究科 | 前田太佳夫 | 風力発電を題材とした小中高校生のための環境体験学習 |
| 生物資源学部 | 柿沼誠 | 獣害対策による獲得・駆除された害獣資源の有効活用—獣肉を利用した地域特産品の開発— |

| 所属 | 氏名 | 活動テーマ |
|------------|-------|--|
| 生物資源学部 | 倉島彰 | 紀北町島勝浦の磯焼け海域における藻場再生活動の普及 |
| 生物資源学部 | 宮崎多恵子 | 宮川の清流に「人」と「活気」を呼び戻すモデル活動 |
| 生物資源学部 | 平塚伸 | 教育ファーム推進事業 |
| 生物資源学部 | 福山薫 | 三重県大紀町野原における安心・安全な里作りのための支援活動 |
| 地域イノベーション学 | 矢野竹男 | 農工商連携による三重県南部中山間部地域の活性化モデルの提案—地域コミュニティを連携するためのポータルサイトの構築— |
| 国際交流センター | 福岡昌子 | 外国籍児童のための母語保持教室 |
| 共通教育センター | 宮崎冴子 | 21世紀の人材育成:「生きる力」をはぐくむためのキャリア教育の推進—ESDのためのユネスコスクールとしての取り組み— |
| 医学部附属病院 | 山村聖子 | 治験啓発活動—治験の必要性和新薬が生まれるまでのプロセスを学ぶ— |
| 医学部附属病院 | 永澤直樹 | 乳がんマンモグラフィ検診受診率の向上と検診結果共有ネットワーク普及のための活動 |

証言 本能寺の変 史料で読む戦国史



藤田達生
八木書店 / 2010 330ページ 3,400円(税別)

織田信長による足利義昭の京都追放から本能寺の変に至る10年間(1573~1582年)の過程は、畿内から東国に広がる信長政権と西国でなお影響力をもつ義昭政権との対立を中心に段階的に論じられるべきである。著者は本書において、本能寺の変を、秀吉との派閥抗争に敗れ左遷の危機に直面した明智光秀が、旧主義昭を奉じて反信長派の戦国大名達と連携しておこした政変、すなわち京都における室町幕府再興をかけた一種の反革命であったとする見方を提示した。本書では、各章ごとに典拠史料を掲載し、本文とリンクさせた。良質の史料を解説・解釈し、それをもとに考察するという、歴史学の醍醐味をぜひ追体験していただきたい。

立ち上がるベトナムの市民とNGO
ストリートチルドレンのケア活動から



吉井美知子 著
明石書店 / 2009 321ページ 4,000円(税別)

ひょんなことからベトナム駐在中に現地人と結婚したもと商社ウーマンが、夫がやっていたストリートチルドレンのケアを手伝い、NGOの立ち上げと経営に悪戦苦闘した経験を学問的にまとめた。もともとは博士論文でしたが、体裁を整えるためにやむなく書き加えた退屈な箇所を削除し、体験談などを加えて読みやすくしてあります。NGO活動がこんなに大変な国もあるんだということ、そして日本からの支援がいかに貴重かということを日本人ボランティアやドナーさんたちに伝えたくて書きました。彼ら彼女らへの感謝の気持ちをこめて。

2010年1月~5月
三重大学の主な出来事

(三重大学広報誌「Flash News」より)
詳しい情報を知りたい方は、下記アドレスのページをご覧ください。
<http://www.mie-u.ac.jp/home/flash/index.html>

- 第78号
 - 平成22年 内田学長「年頭挨拶」
 - 国連気候変動枠組条約第15回締約国会議(COP15)
 - 学長表彰
 - 「キャリアデザイン2009~プロから学ぶ☆将来設計~」
 - 第3回三重大学先端研究シンポジウム
~バイオマスエネルギー最先端研究~
 - 平成21年度三重大学学内企業研究会
 - 地域イノベーション学研究所「研究内容講演会」
 - 「世界青年の船」事業参加外国人青年が学長表敬訪問
 - 平成20年度三重大学教育満足度調査結果発表
 - タイ・コンケン大学から名誉博士号授与
- 第79号
 - 三重県と「医療」分野における連携協定締結
 - 朝日大学と包括的連携協定締結
 - 国際交流特別講演会
 - 院内防災訓練
 - パルリーター主催エンカレッジセミナー
「自分らしいハッピーキャリアの道しるべ~これから就活するヒトへ~」
 - 体育会主催クラブ表彰・新年会
 - 「日本とドイツの文学・文化交流」シンポジウム
 - 男女共同参画に関する意識調査報告会と講演会・シンポジウム
 - 第2回三重大学産学官連携セミナー in 伊賀2009
 - 平成21年度三重大学ハラスメント相談員等研修
 - キャンパス美化活動
- 第80号
 - インフォメーションセンターオープン
 - 第13回環境コミュニケーション大賞
「環境配慮促進法特定事業者賞」を受賞
 - 「平成21年度三重県との定期懇談会」を開催
 - 学長表彰
 - 鈴鹿医療科学大学との連携協議会
 - 平成21年度第1回環境プログラム修了証書授与式
 - 「隣接学校園との連携を核とした教育モデル」報告会
 - 第3回三重大学・鈴鹿医療科学大学合同公開講演会
「食と健康を考える」
 - 女性研究者支援講演会
「米国PhDとその後のキャリア~私の場合~」
 - 松阪港実習船基地を視察
- 第81号
 - 平成22年度入学式
 - アラブ首長国連邦(UAE)シャルジャ首長国首長が来訪
 - 新「さつき保育園」開園式
 - 第8回日本環境経営大賞「環境経営パル大賞」を受賞
 - 平成21年度第2回環境プログラム修了証書授与式
 - 平成22年度科学研究費補助金の交付内定について
 - 白衣授与式
 - 理事・副学長・監事就任挨拶(4月1日付)
 - 学長補佐就任
- 第82号
 - 三重県と大規模地震等の災害発生時における
「覚書」および「協定」を締結
 - 岡文部科学省技術参事官視察
 - 山崎文部科学省整備計画室長視察
 - 生命の駅伝ジョイント市民公開講座~知ってほしいがんのこと~
 - 文部科学省・科学技術振興調整費・地域再生人材創出拠点の形成
「美(うま)し国おこし・三重さきもり塾」入塾式
 - 「放置自転車」を再利用
 - 「芝桜の丘」を目指して
 - 「三重大学カレー」発売記念イベント
 - 地域イノベーション学研究所「第2回特別公開セミナー」
 - 神戸小学校キャンパス内見学



編集後記
三重大学に来ている留学生から「津市は住みやすい町」という話をよく聞きます。筆者は長くこの地に住んでいて気が付かなくなってしまうのだと思いますが、具体的にここが聞きますと、そう言えばそうですねと再発見することしばしばです。今回の津市長と学長の対談の中でも、この地の魅力について触れられています。私たちの街の魅力を理解し、もっと好きになることが、さらに多くの方に愛されるまちづくりにつながるのではないかと思います。



[発行]
三重大学広報委員会

三重大学総務部広報チーム
つしくりままちやちよ
〒514-8507 津市栗真町屋町 1577番地
TEL 059-231-9789 FAX 059-231-9623

[http://www.mie-u.ac.jp/
koho@ab.mie-u.ac.jp](http://www.mie-u.ac.jp/koho@ab.mie-u.ac.jp)

本誌掲載の文章・記事・写真等の
無断転載はお断りします。

